

第六回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

加藤 尚武 著『哲学の使命 ヘーゲル哲学の精神と世界』

(1992年10月30日 未来社 刊)

加藤 尚武 かとう ひさたけ 昭和12年(1937)生まれ。東京都出身。専攻は、哲学、倫理学。東京大学文学部卒業。同大学大学院人文科学研究科哲学専攻・博士課程中退。紫綬褒章受章。千葉大学文学部教授(受賞時)。現在、京都大学名誉教授、鳥取環境大学名誉学長。著作は、『ヘーゲル哲学の形成と原理』、『現代倫理学入門』、『「かたち」の哲学』、『環境倫理学のすすめ』、『脳死・クローン・遺伝子治療』、『応用倫理学のすすめ』、『現代人の倫理学』、他多数ある。

受賞のことば

それぞれの時代に代表的な「倫理学」があっただろう。

和辻哲郎『倫理学』に続くものは、私が書きたい。東西の倫理思想の「比較」という視点ではなくて、共通の議論の「場」を見いだすという視点で、現在の日本の文化に内在する倫理性を明らかにしてみたい。

《選考委員評》

ヘーゲル神話の解体作業

勝部 真長

さきに『ヘーゲル哲学の形成と原理』を著わして、ヘーゲル研究の第一人者と目された著者が、その後、各誌にのせた十一篇の論稿をまとめて一冊にしたもので、書名『哲学の使命』とは、「人にはどれだけの知識が必要か」ということを明らかにすることだ、というのがこの著者の立場である。実際、ヘーゲルに関して、調べが行きとどいて、何でも知っており、さまざまな角度から分析して、ヘーゲルを丸裸にしてしまおうとする、その意気込みはすさまじいものがある。

第九章「ヘーゲル哲学と近代社会の規範原理」は法哲学の問題を扱うが、ここに例の「理性的なものは、現実的となり、現実的なものは理性的になる」の文句の真意を探るに足る新資料(講義ノート)が発見された、としてそれを報告している。また五章の『「精神現象学」におけるキリスト教の必然性』は、日本倫理学会での発表原稿で、学会長の金子武蔵博士と一時間に及ぶ大論争をひき起こしたしろものである。

しかし何よりもこの十年間にマルクス神話の崩壊があった。だからこの著者も「マルクス主義を根底から見直す必要が起こった時に、私はヘーゲル学者として証言台に立つつもりでこの学問を始めた」と、あとがきで述べている。今、一般に、哲学の陣地をマルクスからヘーゲルへ移動させることが行われている。

本書の特色は、男女の架空の対話の形をとった戯文が三ヶ所挿入してあることである。エルンスト(まじめ)なドイツ人のカントやヘーゲルなら絶対やらないであろうが、フモールを解する英国人のラッセルならやりそうな、固い学術書中のあそびでありゆとりである。いかにこの著者が自信満々で余裕綽々、ヘーゲル神話解体の鋭利な庖丁をふるったか、を示すものであり、またそれだけわが国の哲学研究の水準を高めたことを示すものである、として喜ぶべきであろう。

一級品の哲学書

湯浅 泰雄

ヘーゲルは近代思想の頂点とみなされている哲学者で、現代の諸哲学(分析哲学、マルクス主義、実存主義など)はいずれもヘーゲル批判から出発している。加藤氏はヘーゲルの多くの著書、各テキストの異同、ヘーゲルの読書資料まで徹底的に調べた上で、その思考過程を批判的に明らかにしている。その場合の基本視点は、現代における哲学の使命をどう考えるかということにおかれている。

まず第一部の三つの章では、フランス革命以来の近代史の進行過程を思想の論理によってとらえることから起こる矛盾、イギリスから起こった近代の市民社会論（経済的自由論）を急いで克服しようとするところから生じた国家との関係、マルクス主義のヘーゲル批判との関係、およびそこに現われている近代的人間観をめぐる問題がとりあげられている。論理という抽象の尾根を伝って行くヘーゲルの思索をきびしく分析しながら、加藤氏は、近代から今日に至る哲学のありようを観察している。第二部の三章では、「実体は主体である」という有名な命題がキリスト教の批判と論理的再生を企てたものであることを示し、この考え方が現代のキリスト教神学に与えた影響と意味について明らかにしている。そこには国家と宗教と学問の関係をめぐる重要な問題がある。また、スピノザ主義から来た汎神論と人格神論の関係はヘーゲルの論理の中核にふれる問題であるが、この関連が明快に明らかにされている。第三部の三章では、今日主張されている近代の超克とかポストモダン（脱構築）論をヘーゲルに即して鋭く批判している。特に注目すべきは第九章で、「理性的なものは現実的である」という有名な命題について、新発見の資料によってヘーゲルの真意を明らかにし、存在と当為（価値・理想）の相関と統合において歴史と社会が展開するという論旨をみちびき出している。これは従来のヘーゲル解釈を改める重要な指摘である。最後の第四部の二章は、仏教の縁起論（空の存在論）と弁証法の関係、および死に関するヘーゲルの思索についての考察である。

これらのテーマは、どれをとっても現代における重要な思想的問題である。加藤氏は、厳密な分析にもとづきながら、ユーモアをただよわせた歯切れのよい調子で、ヘーゲル哲学、ひいては近代哲学全体が現代に対して提起している諸問題の意義を明快に提示している。近年の哲学書では推賞すべき一級品であると思う。

坂部 恵

著者加藤氏は、主著『ヘーゲル哲学の形成と原理』（一九八〇年、未来社）によって、今日わが国におけるヘーゲル研究の第一人者として知られる一方で、また、バイオエシックスや環境倫理に関する著書をも持ち、こうした時代のアクチュアルな問題についても、西洋哲学の広い素養をもとに、積極的で的確な発言をなすうる数少ないリーダー的な存在として広く知られ、評価されている。

『哲学の使命』という本書の標題は、その加藤氏が、主著と並行して、またそれ以降に書きためたヘーゲル関係の論稿の集成を内容とするが、端的に、この書物を単なるヘーゲルに関する歴史的研究におわらせることなく、むしろ、ヘーゲルを、現今の研究成果に照らし、また現代哲学、現代社会の問題関心の視角から読み解くことを通して、ひとびとがともすれば、現代激動の時代さまざまな未聞の状況や問題に直面して、基本的な指針を見失い茫然自失しがちな現状のさなかにあって、「哲学」に課せられた「使命」にあえて真正面から応答しようとする著者の姿勢を示しているといっていよう。

本書での著者のこうしたねらいは、ヘーゲルの「法哲学」講義の新資料等をもたくみに生かしつつ、共同性と個、存在と価値の硬直した二元論を超え、宗教、市民社会、国家等の具体的問題に即して、共同体における諸問題への人間の自由で柔軟な対処のありかたを示すあらたなヘーゲル像の提示という形で、見事に果たされている。

いわゆる社会主義体制の崩壊後、社会と個人のあるべき関係について、あるいは、大きく変貌を遂げつつある現代社会において、死や環境への対処の仕方について、緊急に答えを求められているわれわれに対して、本書は、的確な一つの指針を与えてくれる。和辻哲郎文化賞受賞作にふさわしい作品として自信をもって推薦するゆえんである。